

『澤瀉集』序

ここ何年かわたしはやっと文章を書くことを学んだ。しかし成績は芳しくない。出身が貧しく、幼時にしっかり勉強しなかったし、後になって学んだ本業も又文学とは完全に縁がなかったから、何か批評の文章を書こうと思っても、身分不相応であるばかりか、実際甲斐ないことでもあった。この自覚は間もなく身につき、近頃書くものはただ感想の小篇でしかないが、わたし自身の一部分を表現できていれば、それでもう満足であり、載道や伝法の考えは全くない。友人が、こうした思いつくままに書いた文章の中ではどういうものが最も上出来なのかと訊いたが、わたしは答えられないのを恥じた。しかし一転して考えると、よいとは言えないまでも、自分でも比較的気に入っていて、少しはその時の感情思想と興味を表現できていると思うものは、やはり三、四篇はあって、いまそれを集めて、苦雨齋叢書の一とする。ゴールドバーグ (Isaac Goldberg) がエリス (Havelock Ellis) を批評して、彼の中には一人の叛徒と一人の隠士がいると言ったが、これは言い得て最も妙である。決してわたしはエリスを引いて自らを重く見せようというのではない。わたしの趣味の文にもまだ叛徒が生きていることを願う。わたしは毫も躊躇することなくこの小冊子を同じ様に中国現代の叛徒と隠士たちの前に薦める。

書名の澤瀉についても、別に深い意味はない、——必ずしも『楚辞』の「澤瀉を筐^かれるに豹の鞞^{かむぶくろ}を以てす」*の意を用いたわけではなく、ただこの小さな草が好きだから書名に使っただけに過ぎない。日本の「紋章」の中に澤瀉があるので、いまその図案を借用して巻首に置いた。民国十六年八月七日、北京にて。

※初出：1927年8月20日『語絲』第145期

*『楚辞』「九嘆」の「怨思」の句。王逸の注によれば、澤瀉の様な悪草を豹の革で作った革袋に満たしたところ何の役にも立たないということを言うとする。